三、往時の技術者氣質

世相が變るにつれて、人間の性格も變つて行きます。技術者にしても、此頃の者と、古い明治時代の人とでは、何だか大分人間が違つてる樣な氣がします。昔の鐵道建設時代の色々な思出話を聞きますと、到底世智辛い此頃では、見られない痛快味のある技術者が多かつた樣です。或は話として聞きますから、そんな氣がするのかも知れませんが、事實技術者としても、個人的な特色のある頑張屋は、段々なくなつて來た樣に感ぜられます。之れも時代の然らしむる處で、仕事が多くなり、複雜になり、專門化されて、萬事共同作業が必要になつて來た今日、昔の樣に、個性をむき出しにして、意見を固執し、頑張り合つたのでは、到底仕事にならないでせう。しかし稍ともすると、理窟なしに妥協的になり勝な此頃の氣分を見ますと、昔の行き方にも共鳴する點があります。此の昔の意地つ張りな技術者の氣分を考へて見ますと、何だか自信の强い點で、名人かたぎを發揮して居る樣な氣がします。昔から名匠達人の極意は、所謂虎の卷で、これは只多年の年期をかけてのみ、體得出來たものであつて、最近の樣にどんな事でも、科學的に調べ上げて、之を知識として一般化して行くのとは、行き方が大分違ひます。土木技術の方面でも、昔は此樣な傾向がありました。色々な工事のやり方、測量のやり方にしても、めいめい實地の體驗から得た熟練と知識とを重んじ、之を虎の卷にしたと謂ふ風があつた樣です。學問の進んだ今日から見ますと、大した事でも無い事が、此の虎の卷になつて居た事もある樣ですが、自ら苦しんだ實地の經驗から得た知識には、書物や、

講義等で得たものとは違ひ、強い自信力が結び付くものです。これが自然と、自信の強い頑張りの技術者を養成したのではないかと思ひます。兎角自信の強い者の寄り合は、眞劍となり、議論となり、果ては喧嘩になり勝ですが、昔の思出話には、此の間の空氣を傳へたものが多い樣です。

熱海線の古い時代の話にも、こんな氣分の技術者のエピソードを傳へたものが、多くありますが、追悼の意味からも、二三故人となつた人の分を紹介して見ませう。

測量の神樣と綽名された山中榮一技手。此の人は、熱海線では、國府津、熱海間の測量を擔任したのですが、一緒に仕事した者の間では、能く話題にのぼる一人です。今日の測量は、豫め線路の通る附近の二千五百分の一の地形圖を作成して、其の圖上で線路のこまかい部分迄、机上測量をやつてから、現場に出掛けて線路を定めますから、測量の技術も大分機械化されて樂になりました。併し當時の測量は、參謀本部の地圖位で大體の見當を付けて、あとはいきなり現場に出掛けて、線路の位置を決めたのですから、測量の大將は餘程地形と線路との關係を頭にもつた經驗者でないと勤まりませんでした。此の大將のやる仕事を「選點」と謂つて居ますが、測量隊の先端にあつて、此點を通れ、こゝに曲線を入れろと、指示して行く後を、中心測量班、高低測量班、横斷測量班、平面測量班が順次追ひながら、進んで行くのです。此の先頭の選點作業が、まごまごして居ると、この後の測量班は全部遊びになつてしまひます。ですから此の選點の技術の巧い拙いが、出來上る線路の良否、測量の能率に大關係があつたのです。此の測量の大將の技術、これが山中技手の尤も得意とする處でありまして、事實古い今日の鐵道線路には同氏の手腕に待つたものが、多くあります。神樣と謂はれたほどあつて、山中氏のやんちやな點は當時有名なものでした。初めて熱海線の測量をやつた時の大將は、佐藤古三郎技師でありましたが、實地で鍛へた溫厚綿密な技術者でありました。山中氏を連れて測量に出る時です。當時の局長だつた古川阪次郎氏は、心配されて山中が謂ふ事を聞かなかつたら、何時でも追ひ返せと謂はれたさうです。測量に出ると、山中氏例に依つて、なかなか佐藤技師などの謂ふことを聞かない。たうとうおとなしい佐藤技師も、我慢しきれなくなつて、或る日「よし今日から測量は乃公自身の手でやる、山中君、君は此の手紙をもつて東京に歸り給へ」と自ら機械を持つて出掛けようとされた事があるさうです。平常餘り小言も謂はない柔和な佐藤技師のこの憤然たる態度には、流石の山中氏も涙を流してあやまつたと謂ふ話です。「涙を流して」は少し大げさかも知れませんが、山中氏のあやまつたと謂ふ事は、當時評判だつたのです。昔の技師が部下のかう謂ふ氣分の連中を統御して行くのは、一骨だつた樣ですが、率直なこだわりのない當時の氣分は愉快でもあります。

初代の熱海線建設事務所長富田保一郎技師。此の人も意地張りな點では、有名な人です。何でも或る時本省に行つて工事上のことで議論して來られたのでせう。事務所に戻つて來られて、部下の者に圖面を持つて來いと命令されて、もつて來た圖面を一眼見るなり「敗けたあ!!」と怒鳴られたことがあつたと謂ふ話です。此の話などは富田さんの氣分をよく表はして居ります。富田さんの現場に來て八釜しいのも有名なもので、丹那トンネルの初期時代に、トンネルの煉瓦卷親方として働いた川瀨老人に、こんな話があります。

「トンネルの熱海口は、とても山が悪くて困りましたが、富田所長が現場に來られた時です、此の部分の煉瓦卷の絶縁ジョイントを何處で作るかゞ問題になりました。富田さんは、入口の地質の悪い部分と奥のいゝ部分の境に、絶縁ジョイントを置かうと主張される。私は此のジョイントを山のいゝ奥の部分迄押し込んで作る方が良いと主張しました。私がなんと理由を述べて説明しても、富田さんは頑として聞かれません。富田さんは一度頑張り出したらなかなか退かないことは能く知つて居りましたが、私としては、どうしても自分の説がいゝと信じましたから、たうとう窮した揚句、表面見える處だけを所長の主張通り、ジョイントに見えるやう切つて置いて、中味は自分の意見通り、續けて煉瓦を卷いてしまひました。」

今日では請負者の土方連中もおとなしくなり、技術にも相當了解が出來て、監督者側と請負者側との關係も至極圓滿に行く樣になりましたが、以前には、双方の監督者に隨分强情張りな人が居て、お互に張り合つたものです。これも川瀨老人の述懐ですが、

「役所の方が變つて來られて、どんな點を八釜しく謂はれるか見てますと、はゝあ、此の點で此の人はしくじつたことがあるなと、想像がつきます。」

なか〳〵穿つたことを謂ふものです。